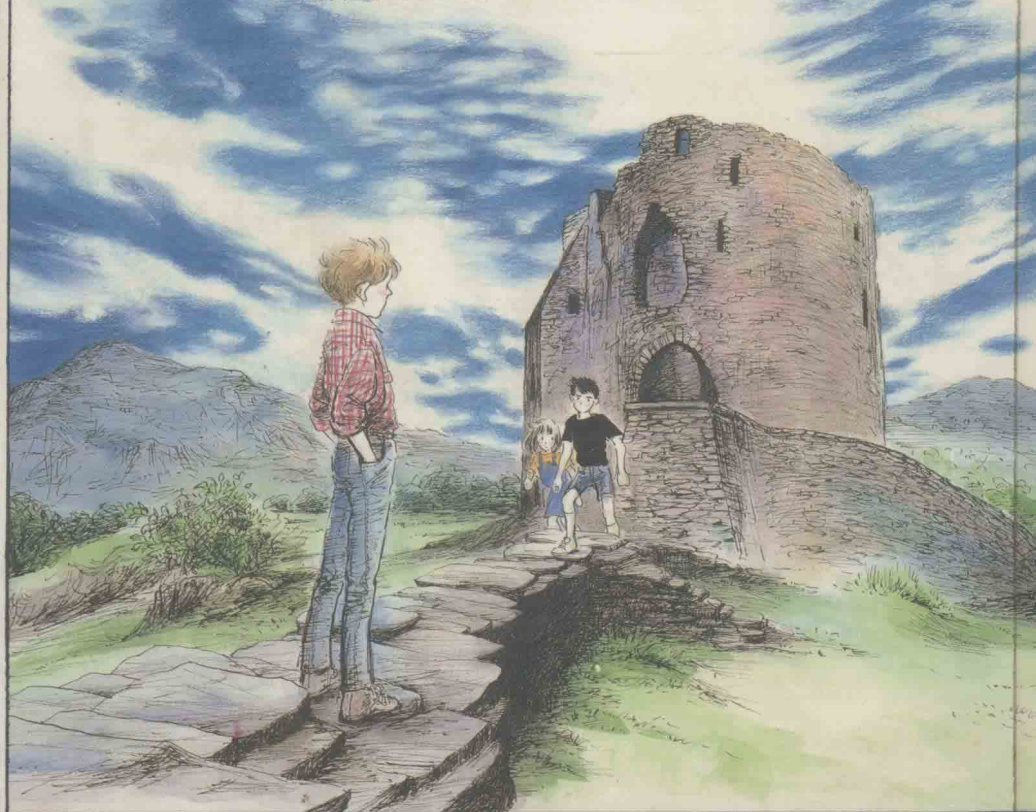


—— 広太のイギリス旅行 ——

緑色の休み時間

三輪裕子・作 いせひでこ・絵



—— 広太のイギリス旅行 ——

緑色の休み時間

三輪裕子・作
いせひでこ・絵



わくわくライブラリー

緑色の休み時間
——広太のイギリス旅行——

1988年4月14日 初版第1刷発行

定価1000円

著者 三輪裕子

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21(郵便番号112-01)

電話 東京03(945)1111(大代表)

N.D.C.913 206p 22cm

印刷所 豊国印刷株式会社

半七印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

©Hiroko Miwa 1988

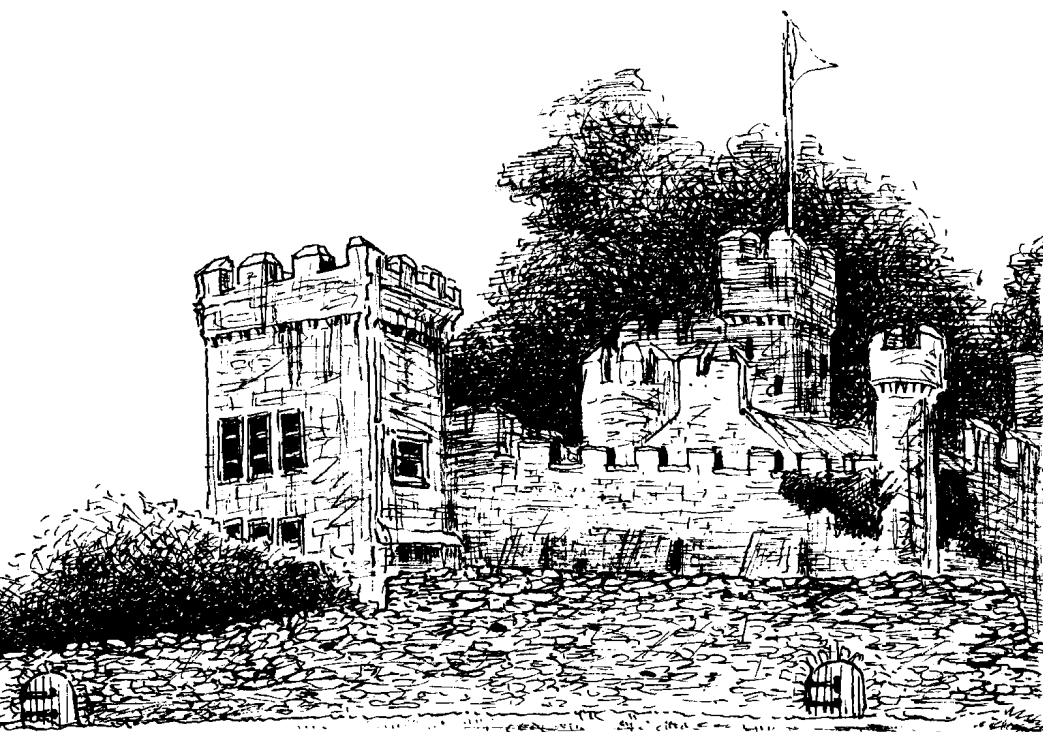
Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえます。なお、この本について
のお問い合わせは児童局児童企画部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-195605-1(0) (児企)

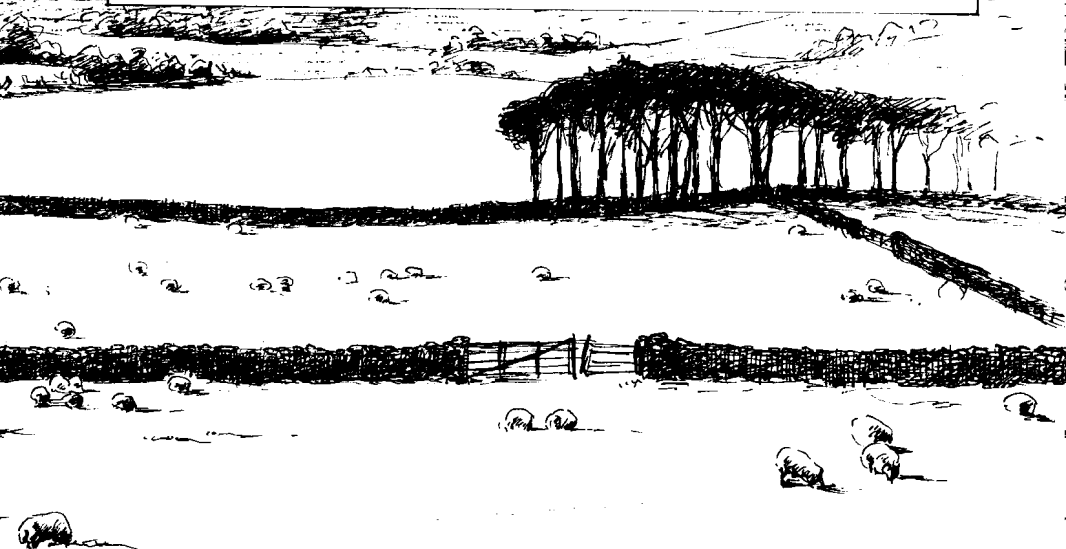
緑色の休み時間

——広太のイギリス旅行——



もくじ

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
さよなら、ウェールズ	城をぬけだす	絶望か	とじこめられて	ランダルの家	ふたたび古城へ	古城	友だち	ゴツゴツ山にのぼる	出会い	見知らぬ少年	ウェールズの生活	農場（ファームハウス）
193	177	165	151	134	120	102	87	74	56	42	29	5





作者／三輪裕子（みわ ひろこ）

1974年，東京学芸大学教育学部を卒業。翌年ごろより児童文学の創作を始め，「子どもたち山へ行く」で，第23回講談社児童文学新人賞を受賞。同作品を改稿し「ぼくらの夏は山小屋で」と改題し，1886年に出版した。「緑色の休み時間」が受賞後はじめての作品となる。現在，東京都調布市に在住。

画家／伊勢英子（いせ ひでこ）

1972年，東京芸術大学デザイン科を卒業後，1年間フランスでイラストレーションの勉強をする。「むぎわらぼうし」（講談社／絵本にっぽん賞受賞）ほか，多くの絵本やさし絵を手がけ，「マキちゃんのえにつき」（講談社）では，文章も書くという多才な活躍をしている。現在，東京都渋谷区代々木に在住。



「メーエー、メーエー。」

「フーエー、フーエー。」

かぞえきれないほどのひつじが、ひっきりなしにいないている。

こういうのを、イギリスのいなからしい景色けしきっていうのかな。

一面の緑みどりの山はだに、ぼつんぼつんと見える白い点てん。あれがぜん

ぶひつじだなんて、おどろきだ。

広太こうたは、一けんのうじようの農場のまえ前にとめられた車から、ふらふらに

なつてでてきた。きようは、朝あさはやくから夕方ゆうがたまで一日じゅう車

に乗りつづけていたので、まだからだぐらぐらとゆれているよ

うな気がする。しかも、こんな小さな乗じようようしや用車におとなふたり、子

ども四人がぎゅうづめになってきたので、全身ぜんしんがこわばっている

ようだった。

からだをほぐそうと大きいのをし、すがすがしい空気をむね

いっぱいにするんだ。草くさのにおいと、動物どうぶつのふんみたいなにお

いが入りまじって、鼻はなをつく。いなかのにおいついていうのかな。

いいにおいだ。

「あーあ、生きかえったような気がする。」

あとからでてきた千里も、思いきり深呼吸しながらあたりを見まわした。

「これで長生きできそうで、よかつたじゃないか。」

広太が、にやつとわらつていうと、千里もおかしそうにわらつた。

二日まえ、二年ぶりに広太と顔をあわせたとなんの千里の第一声は、こうだった。

「あーあ、よかつた。広太くんたちがきてくれなかつたら、わたし窒息していたわ。」

その日、小学校六年の広太と、いもうとで三年生の桃は、母親につれられて、千里たち一家が二年まえから住んでいるイギリスにやつてきた。三人は夏休みになつてすぐに日本を出発し、十六時間も飛行機に乗りつづけて、ようやくついたのだつた。

生まれてはじめての外国だ。広太はヒースロー国際空港から千里の家につくまででさえ、おどろいたり感激したりで、興奮しつづけていた。

ハイウェイは、なにもない野原のまん中を、ただひとすじの線をえがいて、地平線のむこうへと消えていく。イギリスは日本とおなじ島国だけれど、ぜんぜんちがつていた。こんなに家のな

いところ、東京の近くじやどこにもない。

千里たち一家が住んでいるのは、ロンドンから電車で四十分くらいのところにあるサーリー州のホースリーという町だった。

そこは、れんがづくりの家々がほんのすこし建ちならぶだけで、あとはほとんどが牧草地と自然の林。広太が想像していた東京の郊外の住宅地とは、まったくちがっていた。

「かわいい家がいっぱい。おとぎの国みたい。」

桃は、家を見るだけでよるこんでいる。

「そうね。えんともあつて、あれならサンタクロースもこまらないわね。」

かあさんも、うっとりしながらあいづちをうつ。

三人は、牛でも馬でも家でも、なにを見ても日本とちがう景色に感激し、期待にむねをおどらせて、千里の家についたのだった。

が、ついたとたん、さっきの、なんだかあんまり楽しくなさそうな千里の声にでむかえられて、広太はすこし気がぬけ、ぼかんとしてしまったのだった。もつとも、広太がぼかんとしたのには、もうひとつわけがある。

広太と千里は、おない年のおさななじみだった。ふたりの母親がむかしからの友だちどうし

だったので、赤んぼうのころから、しじゅう行き来して育った。

学校にいくようになってからも、春や冬や夏の休みには、いつも二家族でいっしょに旅行したり、キャンプしたりしてすごしてきた。活発でおてんばだった千里は、木のぼりにしても、高いところからとびおりにしても、山でちよつと危険な岩場をのぼるにしても、広太に負けてはいなかった。広太はそんな千里を見て、よく、

「おまえ、どうして男に生まれなかったんだろうな。」

といていた。

その千里が、二年ぶりに会ってみると、はつとするほど変わっていたのだ。髪もかたにかかるほど長くなっていて、背もすらつとのびて、いつのまにか広太を追いこしていた。

広太はまるでちがう人でも見ているような気がして、あいさつもしないでつっ立っていた。

「あら、千里ったら、なんですか。ごめんなさいね。いくつになっても礼儀知らずで。せっかく日本からきてくれたのに、あいさつもしないで。……でも、ほんとうにひさしぶりね。つかれたでしょう。さあ、はやく中にはいって。」

千里のおかあさんは、みんながまだ玄関先にいるのに気がついて、あわてて中にまねき入れた。「うちの広太だっておなじよ。でも、千里ちゃん、ちよつと見ないあいだに、すっかりイギリ

スの貴婦人^{きふじん}みたいになつて、見とれちゃったわ。」

かあさんと桃^{もも}が、つづいて中^{なかつ}にはいつていつた。

「いやあねえ。おかあさんだつて、いま、あいさつしたとこじゃないの。」

千里^{ちきと}は、すこしむくれた顔^{かほ}をしたが、とつぜん気がついたように頭^{あたま}をぼんとかるくたたくと、
とつてつけたように広太^{こうた}にむかつていつた。

「ようこそ、いらつしやい。長旅^{ながたび}でおつかれじやないですか。」

話^{はな}しはじめれば二年まえとちつとも變^かわつていないので、広太^{こうた}は思^{おも}わずわらつてしまつた。

それからまるまる一日、広太^{こうた}は千里^{ちきと}につれられて、桃^{もも}と、桃^{もも}より一歳^{さい}年下で千里^{ちきと}のいもうとの
由美^{ゆみ}といつしよに、ホースリーの町^{まち}を歩いて見てまわつた。

町の中心^{ちゆうしん}からすこしいくと、もうまわりは牧草地^{ぼくそうち}。ほんのすこし起伏^{きふ}があり、木々^{くぐ}が点在^{てんざい}して
いる牧草地^{ぼくそうち}は、おわりがあるかどうかさえわからないだ。

その広大^{こうだい}なところで、ぽつんぽつんと三十頭^{とう}ばかりの牛^{うし}が草^{くさ}を食^たべていた。自然^{しぜん}の野原^のも公園^{こうえん}
も、たくさんあひるが泳^{およ}いでいる池^{いけ}も、どこにいつても広^{ひろ}くて、広太^{こうた}には、千里^{ちきと}がこんなところ
にいて、なぜ窒息^{ちっしき}しそうなかわからない。

「わたしも、二年まえにきたときは、思^{おも}いきりかけまわつてよろこんでいたのよ。でもね、ひと

りでかけまわっていて、おもしろいと思う？」

千里にいわせると、ここは、きのうも、きょうも、あしたもおなじ、ただ広いだけのところなのだそうだ。町はねむったようにしずまりかえっているし、子どもなんて、めったに見かけない。たまにいても、風のようにすばやくかけまわる子なんて、見たことがない。車で送りむかえしてもらって、遠くの学校にいけば、まあまあ楽しい友だちもいるけど、家に帰ればいつもおなじ、遊び相手は二年生の由美だけ。おとうさんはロンドンの大学での研究にいがしいし、おかあさんは、のんびり家でししゅうしたりしていて、それでちつともたいくつしないみたい……。千里の不満はあとからあとからつづくのだった。

そんなときに、広太たち一家がやってきたというわけだ。

イギリスにきて三日めの今朝、広太たち一家と千里、由美、そのおかあさんの六人は、夜明けと同時にホースリーの家をでて、一路ウェールズ地方めざして走りつづけてきた。たいくつな町をぬけだして、北ウェールズの農場でひと夏をすごすというのが、千里たちの立てた計画だった。

千里の家からイギリスの中西部にあるウェールズの北までは、車でほぼ十二時間ほどかかることになっている。かあさんたちふたりが交代で運転し、食事のためにやすんだ以外は、ずっと車

に乗りつづけた。なんどか道をまちがえたりしたが、夕方七時になって、ようやく北ウエールズの農場近くまでできていた。

国道をはなれて、車が一台とおれるくらいのはばしかない農道にはいつてだいぶたつ。とおりがかりの町できいたところ、この農道のどこかに、みんなが泊まる予定のウーシヤフ農場があるということだった。

イギリスには、たくさんの方宿があつたけれど、千里はその中から、わざわざ農場をえらびだした。

「遊びにきてまで、夕食のとき、きちんとした洋服を着たり、行儀を気にして食べるなんて、いやなのよね。」

というのが理由だった。

いま、千里のおかあさんが、一けんの農場の前に車をとめて、ききにいつてるところだった。

広太は待っているあいだに、しみじみとあたりを見まわし、ここがウーシヤフ農場だといいな、と思つていた。

ついたとたん、まっさきに目にはいつたのは、入り口に堂々とそびえ立つ木だ。広太は、その木が氣にいつた。もしここに泊まるのなら、あの木にどこまでのぼれるかやつてみようと思つ





た。なんの木かわからないが、高さが十五メートルはあるかと思うほどの大木だ。

「あれ、大かえでの木よ。こんど、のぼるの競争しよう。」

広太が見ているのに気がついて、千里がいった。もう、すっかりこの農場ときめているみたいだ。

そのほかに広太が気にいったのは、農場のうしろのなだらかな山だ。ゆったりとした緑の山はだに、ぼつんぼつんとひとつの白い点が見え、いかにもイギリスという感じだ。あの山をひとつだけに占領させておくことはない。いつかのぼってみよう。

しかし、そんな山よりもっと広太が気にいったのは、この農場にくるとちゅうで休憩したときに見た、ごつごつと絶壁のようにそそり立った岩山だ。ほんとうにかっこいい、ほれほれするような山だった。

さきをいそいでいたので、すこししかそこにいらなかったけれど、そのとき広太は見てしまったのだ。半そでシャツに半ズボンをはいて、リュックサックをかついだ女の人が、きゆうな山道をおりてくるのを。女の人にのぼれるなら、自分にだつてのぼれないはずがない、かなりけわしそうな山だったけれど、いつかそのゴツゴツ山にも挑戦してみたい、と広太は強く思った。

その岩山のあと、車は湖にでると、湖岸を走りつづけて、細い農道にはいつてきたのだ。